



# タイムマシンなんもく号

～磐戸橋の今昔～



昭和30年代の磐戸橋

南牧川沿いに県道を走ると、数回川を渡ります。村内で一番最初に県道として南牧川を渡るのが「磐戸橋」です。今懸かっている橋は昭和37年11月に完成とあります。多少欄干に錆びはありますが、南牧の大動脈です。平成19年の台風災害の時は、溢れ出た川の水が今にも届きそうでした。

その磐戸橋も、以前は吊り橋でした。写真①は昭和30年頃のものでしょうか。旧尾沢農協の倉庫は、栃木県の大谷石を使っています。建設当時、その石を積んだ車が吊り橋の磐戸橋を通れるかどうか、渡れるかどうか、みんな心配して見ていたそうです。未舗装の道だから、おそろく砂ぼこりも凄かったんだらうな…ちなみに橋には入口と出口があり、「磐戸橋」と書いてあるのが入口、平仮名で「いわだぼし」が出口です。く磐戸橋の見守り隊長 金田寄稿



現在の磐戸橋

南牧村に来て3ヶ月が経ちました。季節が移りゆくなか、日々村の自然豊かな景色と南牧川の澄んだ清流が見せてくれる光景に、毎回感動をしています。

そんな、南牧村民としては「ひよっこ」の私 地域おこし協力隊(谷津)が最近とつても感動したのが、川沿いでホテルを見たことです。現在道の駅で研修させてもらっているのですが、最近村の方からホテルを見たというお話を伺い、自分も実際に見てみたいと、道の駅の同志でホテル探検隊を結成したのでした。

そして7月に入ったある日のことです。ついに、ホテル探検隊の初出勤です。村内の、とある地区の川沿いで見たという目撃情報を

## 『ぶらいなんもく村』

～ほ ほ ほ～たる来い～

頼りにひたすら進み…。私は、川沿いを目を凝らして見ていました。すると「ほわーっ」と青いかなすかな光が目の前に現れました。早速車から降りて、川岸をのぞき込みます。「くっも光ってる！」小学生の時にホテルを見て以来の体験にテンションも上がります。しかも、私が昔見たのは田んぼの脇を流れる小川で数匹を見ただけ。今回は、溪流沿いの木々に止まっているホテルもいて、まるで天然のクリスマスツリーのようにです。淡く光るホテルは、ゆーっくり飛んで光っては消えてと、とても幻想的で時間の感覚がわからなくなるような、不思議な体験でした。後で調べてみると、清流が流れているだけでなく、ホテルの出入り時間や条件があることを知り、この時期しか味わえない貴重な体験が出来たのだなあと、とても嬉しく思いました。これからはアンテナをしっかりと張って、南牧村の魅力を見つけたいこうと思います。

く自転車で風を切る 谷津特派員寄稿

## 六車八木節

六車地区に伝わる伝統



「こうやって…こう！」 簡単そうにやっているのに、難しい…

南牧村六車 ぐるくるま地区で活動している「六車八木節保存会」私は、南牧村に来た当初から、保存会の活動に参加させていただいています。この六車八木節は、夏のお盆時期に開催

される「ぶらさど祭り」や村の老人ホームで催される「ぞわやかホームの納涼祭」、『ヲラオケ大会』の舞台で披露されていて、村内の方々に楽しんで頂いているのですが、現在、八木節保存会は存続が危ぶまれているのです。

この六車八木節、始まった時期や経緯は不明なのですが、保存会の会員が知っている限りでは、遅くとも1953年には存在していたそうです。当時は村内の各集落で青年団などを中心に踊っていたということなのですが、時が経ち、次第に踊る集落も少なくなり、担い手を確保することも難しくなり、一時は途絶えてしまったそうなのです。そんな中、約20年前に発足し

たのが現在の六車八木節保存会です。

そんな八木節保存会も、すでに会員の高齢化が進んでおり、村内から後継者を探しても見つからない状態になってしまいました。ここ幾年かで村への若い移住者が保存会に加わったものの、継承していくにはまだまだ厳しい状況。そこで、首都圏を中心に村外から南牧村を盛り上げていくために活動している団体である「なんもく大学」に協力を求め、新たな担い手探しを行うことになりました。

5月、八木節保存会となんもく大学のメンバーで話し合い、なんもく大学も今年のお祭りなどに参加することが決まりました。6月には最初の合同練習があ

り、八木節保存会の面々が、なんもく大学のメンバーたちと一緒に太鼓を指導するなど、大いに盛り上がりました。今後も、7月、8月と練習会を予定しており、お祭りでも披露するために頑張っていけます。六車八木節のステージを見て、興味・関心を持ち、「一緒に踊ってみたい人が増えてくれること」を心から祈っています。

今後の予定

- ・8月14日ぶらさど祭り
- ・8月26日納涼祭
- ・9月3日カラオケ大会

私にとっては三年目の舞台です。みなさま、ぜひ見に来てください！

く八木節特訓中の 賀籠六でした

### 編集後記

澄み渡る空に映える山の紅葉を前に、柿やクルミなどの木の実は、きりぼし乾燥芋)にする芋を収穫、喜びに浸る。数か月前に南牧村にも訪れるであろうそんな「季節に思いをはせ、セミやヒグラシの声、風や川の音に包まれながら、紙面の編集作業に打ち込む。なんて贅沢な環境にいるんだらうかと、ふと感じた。

これからの季節は、ぶらさど祭りや大日向の火とぼし、納涼祭、磐戸神社の秋祭り、農業祭などの行事が目白押し。おいでなんし!

### 秋の話

「秋」の由来は何だろうか？紅葉や熟した木の実の「あか」色が由来であるという説があれば、稲や芋などの穀物が「飽き満ちる 豊富に実る」さまを表すとも言われている。また、澄み渡る「清明 あきらか」な空が由来とも考えられるようだ。

ちなみにアメリカ英語はfall フォール 「落葉」イギリス英語だと autumn オータム 「収穫期」言語は違えど、共通の視点があるのが興味深い。